

<会員のひろば>

エコロジー経済学の基礎

池田 伸 (千葉県/千葉商科大学・商経学部)

1. はじめに

市場メカニズムを信奉する経済学者にとって、環境問題は経済学のもろもろの分野の中の一応用分野にすぎない。いやしくもマルクス経済学者であるかぎり、環境問題は重要ではあるが資本-賃労働関係という基本矛盾の一つのあらわれといわねばならない。私が考えている経済学は、しかし、それらとは異なる。これをとりあえずエコロジー経済学とし、以下でその要旨を述べよう。

2. 自然の法則

私見では、環境問題の理解の基礎に次の三つの基本的な法則を据えることが重要である。それは1)エネルギーと質量とに関する保存則2)エントロピーの法則および3)自然選択である。私が面白いと感じるのは、数字のより若いものを基礎に次のものが導かれるにもかかわらずそれらは互いに矛盾した現象の説明原理となっていることである。

3. 生産と生態系

以上の基本法則から、経済活動を含むあらゆる生産/生命活動は本質的にエントロピー的過程である、ということにしたがう¹⁾。つまり環境から見ると、「生産」された有用物によって維持される秩序とその生産および消費の過程で発生する無秩序とを比較すると、後者が必ず優る。にもかかわらず生産に意味があるのは、生産によって、

- (1)生態系の平衡を少ししか移動させていない
- (2)生態系外から低エントロピー資源を投入する
- (3)廃物・熱を捨てる余裕が生態系にある

ばあいにかぎられる。この認識が経済学にはまったく希薄である。新古典派は閉じた交換モデルを描くが、環境に開かれていないシステムの結末は熱死のみである。他方、マルクス派は石炭や石油の掘り出し、SO_xやCO₂を放出する経済活動も「再生産」から除かない。また、労働を称揚する労働価値説は、労働もまたエントロピー的であり、た

だ上記(1)の条件の下でのみエコロジー的に健全であるにすぎないことを見逃している。

4. 人類史と生産力

近代主義は「自然に翻弄され飢えに苦しむ未開人」の像を作り上げてきた。就中マルクス主義者は、欧州に見られた生産様式の継起的な変遷を生産力に駆動された、価値的な意味での進歩と理解している。人類は本能的に生産力増大を求め、貧困とは生産力の過小であり、もっと生産すればもっとゆたかになる、というわけである²⁾。

しかし、さまざまな民俗誌に表れた多様な前近代の生産様式は各民族の自然環境への適応であるといえる。「未開人」にあってはゆたかになるために労働を投入するというのは、まして労働時間短縮のために生産を増加させるというの、まったくの詭弁としか解されないだろう。実際、農業の開始は人口成長に耐えられず労働負担増を生ぜしめた、呪われるべき最初の環境問題であった。

5. 自立と協同のエコロジー経済

私の理解では利己的な個体(自立)の間に協力関係(協同)が生ずるメカニズムの解明こそが、経済学の基礎である。自由のために自由を手放すという同じこのメカニズムが企業をはじめとする多くの制度、貨幣と中央銀行、工場法、そして基本的人権をもたらした。現代の環境問題についても、各企業がその枠内で競争する条件を見いだすことが第一条件に思われる³⁾。その上で、より少なくなかつ効率的に希少な環境資源を消費すれば、人類の存続は長引かせ得るだろう。その後には人権尊重ゆえに文明社会が減ぶなら、それはむしろ甘受すべきことかもしれない。(注1: N. Georgescu-Roegen『経済学の神話』東洋経済1981年。注2: しかし、生産力を誰も定義しないし測定もしない。野澤他編『自立と協同の経済システム』大月書店1991年、7章参照。注3: 同前)。